

令和6年度 日本大学文理学部個人研究費 研究実績報告書

所属・資格 史学科・特任教授

申請者氏名 土屋 好古

研究課題		ロシア第一次革命の総合的研究
報告概要	研究目的 および 研究概要	2025年にロシア第一次革命は生起から120年を迎える。この革命は、ロシアの専制政府を打倒することには失敗したが、19世紀後半以降の近代ロシアの歴史における様々な矛盾や課題が噴出した極めて重要な事件であった。申請者はこれまで日露戦争を契機としたロシア社会の変革志向と第一次革命を一連の過程として把握する著書を発表したほか、第一次革命期のペテルブルク労働者の運動の分析に従事してきた。こうした研究蓄積に基づきながら、本申請研究では第一次革命を全体的に捉えなおすことに取り組むことを課題としたい。近年のいくつかの新しい研究動向にも注意を払いながら、ロシア第一次革命の意味と意義を再考する。
	研究の 結果	今年度は、下記に記す2点の成果物を発表した。まず、歴史学初学者を対象とした史学科教員の共著書では、歴史学がはらむ客観性と主観性の問題を二度にわたる体制変化を経験したロシアにおける第一次革命研究を素材に検討し、体制変化が歴史家の認識にも影響していること、しかし史料に立脚することで歴史学の客観性を確保しうることを説いた。もう一つは、1905年11月におこった「クシカ事件」を取り上げて、辺境でのこの事件が当時のツァーリ政府と革命運動の力関係を象徴的に明らかにしていたことを実証的に論じた。以上の成果に加えて、1906年前半のペテルブルクにおける大量失業問題と、第一国家ドゥーマ選挙への労働者の関与の在り方について、引き続き史料分析に努めた。
	研究の 考察・ 反省	近年取り組んできた第一次革命の研究史の分析から、一般向けとはいえ一定の結果を公表できた。第一次革命期の同時代的論説は、厳密には歴史学的研究とは言えないが、そこには実体験を踏まえた重要な論点が数多く含まれている。一部はすでに成果物として公表しているが、さらに同時代的論説の分析を進める必要がある。また、国家ドゥーマ選挙と失業問題については、史料の収集と分析に努めているが、成果物として公表に至らなかったことは反省材料である。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所  研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>日本大学文理学部史学科編『歴史学の扉－歴史を学ぶということ』山川出版社、2024年12月（土屋好古「ソ連社会主義体制下のロシア・ソ連史－ロシアにおける第一次革命研究の変遷－」 pp.153-162）</p> <p>土屋好古「「最後の勝利」？－「クシカ事件」とロシア第一次革命におけるその意味」『史叢』第112号、2025年4月刊行予定</p>	